

わって参りましょう。へつづく

題材法話

＊前号からのつづき

○仏教の人間観

ノーベル平和賞を受賞されたワンガリ・マータイさんが、日本語の『もったいない』という言葉を、とても素晴らしい言葉だといつて、全世界に広めておられます。

この言葉に代表されるように、私たち日本人は、仏教にもとづくものの考え方、を、日常生活に取り入れ、豊かな精神文化を育んできたのです。ところが昨今、どうもおかしくなつてきています。もつとも大切にしなければならぬ、いのちの問い、題さえも、おろそかに考えられて、いろいろな事件や事故が相次いでいます。や事故を起こす人は、けつして「特別な人」ではない、親鸞聖人は「煩悩具足の凡人」



夫・火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごと・たわごと、まことあることなきに」と、一つ間違えればこの私も、なにをするかわからない存在である。と仰るのです。

○仏さまの願いに生きる

自分自身は正しいと思つて、都合のためとなり、やがてはいざとなれば何をしようか、私たちが存在する。というの、生老病死という根本の苦を抱えながら、「好きだ、嫌いだ」「損だ、徳だ」と、さ迷いながら生きていく。みなもつて、そらごと・たわごと、まことあることなきに」と示されるのです。けれども同時に仏教は、そのようになつていく。生かされて、きのおも、存在「でもあり、そのおと、早くない、かな、け、く、の、で、す。その生か



されて生きておる全てのものが、どうか救われてくれよと等しく願われている存在なんだ」と南無阿彌陀仏のみ教えは説いて下さるのです。そのことに気づかせて頂くと、今までの「損徳」「勝ち負け」の世界であつたのが、「お陰様、ありがとうございます」の世界へと少しづつ変えさせて頂けるのです。『もつたいたない』の世界に気づかせて頂けるんです。

○脈々と相続され続けてきたお念仏

ワンガリさんは、こんなよい言葉があつたのかと驚かれたそうですが、私たちには幸いに、遠い昔から、仏様の教えを通じて、この心に気づかされて頂いて、この一三千年もの前の、お釈迦様の教えや、八百年もの前の親鸞聖人の教え、そんな



古い教えが今の世の中に通ずるのか」といったようなことを、仰る方もおられます。けれども、人間の根本の問題は、なにも変わっていないのです。仏教は、その根本の問題を解決する教えで、その教えが「本物」だからこそ、三千年、八百年の永いあいだ、脈々と伝えられてきたのでしよう。渡つて相続されてきたことの方が、すごいことであり、いかにお念仏が「本物」かということです。親鸞聖人は、「まことあることなきに」の言葉の後に、「ただ念仏のみぞ、まことに、おられます。とおられます。お念仏は、お念仏を喜ぶ人達の姿によつて相続されてきました。どのような世の中であつても、本物の変わらぬ教えを学ぶことが大切でありましよう。

